



# フジ虎ノ門整形外科病院 地域に寄り添って

幅広い分野で  
地域に貢献

今回取材したフジ虎ノ門整形外科病院は、整形外科を中心とした外科系・リハビリテーションの高度専門病院だ。また虎ノ門グループとしても障がい者医療やスポーツクラブ、保育園など幅広い分野において地域に貢献している。

フジ虎ノ門整形外科病院に併設するフジ虎ノ門こどもセンターでは、障がいのある子供や難病を抱える子供の治療や、学童クラブなどすべての子供たちが生き生きと暮らせるよう取り組みを行っている。土田さんは「近年、発達障がいをもつ子供が増える一方で、障がい者が生きにくい世の中になっていくと感じます。障がい者医療は小さな分野ですがたとえ赤字でもやらなくてはいけない大切な分野です」と語る。

## すべての人々のために

なぜ御殿場で開業したのか、フジ虎ノ門グループの土田博和会長に話を聞いた。土田さんは石川県出身で、幼少期に静岡県へ引っ越し、静岡で育つたという。富士山が大好きで、大自然の下で仕事をしたいという思いから御殿場で開業したそうだ。

## 様々な人と出会う

働く上での信念として「昔、土木作業員として働いていたときにどんな人でも差別せず一人の人間として見ることの大切さを学びました。苦しい環境で生活したことがどんな状況でも人を助ける原動力になっていると思います」と語った。

また、土田さんは映画の監督や政治家としてワイドに活動している。様々な活動をする中で、色々な人と出会うことができ、そのとき出会った人に助けられたことが何度もあった。



▲明るい雰囲気にあふれている



▲話をする土田博和会長

高校生に伝えたいことについて土田さんは「勉強だけでなく、スポーツなど色々なことを経験し、多くの人と出会ってほしいです。幼いころの友達は今将来困ったときに必ず助けられるはずですよ」と話した。

# 土井製菓株式会社 顧客に喜んでもらうために

## 東部へ自慢できるお菓子を

皆さんは、全国菓子大博覧会内閣総理大臣賞を受賞した「富士の白雪カスタード」や名誉総裁賞を受賞した「土井の田舎草もち」を一度は見たことがあるだろう。私たちはこれらを製造する土井製菓株式会社の代表取締役社長、土井隆司さんに会社設立について話を聞いた。

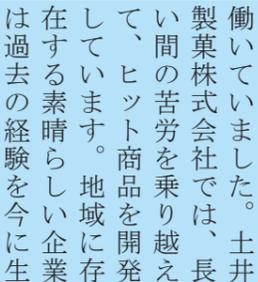
土井さんは「この会社は、羊かんの下請け会社から始まりました。私の幼少期には、母が私を背負いながら羊かんを煮たり、父が配達



## 東部へ自慢できるお菓子を

皆さんは、全国菓子大博覧会内閣総理大臣賞を受賞した「富士の白雪カスタード」や名誉総裁賞を受賞した「土井の田舎草もち」を一度は見たことがあるだろう。私たちはこれらを製造する土井製菓株式会社の代表取締役社長、土井隆司さんに会社設立について話を聞いた。

土井さんは「この会社は、羊かんの下請け会社から始まりました。私の幼少期には、母が私を背負いながら羊かんを煮たり、父が配達



▲土井隆司社長

今回、取材させていただいたフジ虎ノ門整形外科病院では、過去の経験から、どんな人とも対等に接することの大切さを信念として働いていました。土井製菓株式会社では、長い間の苦労を乗り越えて、ヒット商品を開発しています。地域に存在する素晴らしい企業は過去の経験を今に生かして成功を収めています。

## 編集後記



▲白衣を試着した新聞部員

「何事も一生懸命やっていたら、いつか必ずあなたが応援してくれる人が現れます。幼いころからなりたいと思っていた、そういう仕事に就けるかはわかりませんが、肩ひじ張らずに少し物事を気楽に考えて毎日目の前のことを頑張る。そうすれば誰でもきっと報われると思います」と話した。

「経営上の苦難」  
実は、土井製菓株式会社は創業当初に経営難にさいなまれたという。「我が子供の頃は父母共に働いており、借金も抱えていました。父は一日中外へ営業・配達へ行き、母は家事をしつつも、私と一緒に菓子を入れる箱を折っていたことをよく覚えていますが」と懐かしそうに語ってくれた。

「経営上の苦難」  
最後に、私たち高校生へのメッセージを聞くと、人との出会いを大切にしたいという答えが返ってきた。「何事も一生懸命やっていたら、いつか必ずあなたが応援してくれる人が現れます。幼いころからなりたいと思っていた、そういう仕事に就けるかはわかりませんが、肩ひじ張らずに少し物事を気楽に考えて毎日目の前のことを頑張る。そうすれば誰でもきっと報われると思います」と話した。

# ものをづくりに誇りを

## 伊豆技研工業株式会社 渡邊嘉彦専務



伊豆技研株式会社の外観

伊豆技研工業株式会社は電子基盤の実装を行っている。主にロボットやシリンダーを制御する機械の基盤を作っている。産業用の機器の基盤を中心に作っており、その多くは製品を作るための制御用部品で、1日に多くて4000個ほどの基盤を制作している。



取材を受ける渡邊専務

～会社プロフィール～  
所在地 三島市  
昭和51年設立  
産業用機器ユニットや医療機器など幅広く対応。スピーディに動ける強みを活かして、様々な仕事を請け負っている。

### デジタル化を進める

私たちが伊豆技研は、幅広い種類の基盤を高品質で提供できるようにIoTを取り入れています。また、IoTをどのようにに仕事と結びつけるかも考えています。例えば、社内の衛生環境を改善するための5

伊豆技研は、地域に密着した活動を行う一方で、東南アジア諸国と連携した取り組みも行っており、まさに「グローバル」に活動する企業だ。また、グルッペもパンで日本一を目指し、全国をフィールドとしつつ

### 地域に根差した会社作りを

どちらも企業も、大きな活動を行う傍ら、

S活動  
（整理・整顿・清掃・清拭け）の一環として、社

### 自分自身で考える

自分の仕事をどう遂行するかを社員一人ひとりが考えることが大事だと思っています。組織の中で役割はあっても、会社を良くしていくのは一人ひとりの取り組みです。だからこそ、自分自身で考え、振り返り、各個人が組織の改善に繋げることが大切です。

内のホコリの数を可視化するパーティクルセンサーを設置しています。また、IT人材の育成にも努めています。例えば、三島市と協働して子ども向けの電気工作会を実施したり、静岡県IoT活用研究会の一員として、中小企業向けにIoT化推進のサポートなどを行っています。



▲商品を説明する石渡社長(左)・石渡常務(右)

～会社プロフィール～  
所在地 函南町 昭和26年設立  
パンやワッフル、どら焼きなど、様々な商品ラインアップを展開している。また、自衛隊への非常食の提供や大手コーヒーショップへの販売など、全国的にも活躍している。

株式会社グルッペ・石渡食品有限会社 石渡浩二社長 石渡麗子常務

# 「観る」ことを大切に



▲みしまフルーティ キャロット

### 「おいしいを前提に」

弊社のパンには、様々なこだわりがあります。例えば、「みしまコロッケパン」のコロッケは、自社で製造しています。また、パンはしつ

### 「考え方を一歩前進」

また、私たちは「観る」ことを大切にしています。周り

### 編集後記

取材させていただいた企業の方々をはじめ、三島信用金庫の担当者の方の協力を得て、紙面制作ができました。この場をお借りしてお礼申し上げます。未熟な点も多いですが、企業の魅力が伝われば幸いです。

【二面担当】

県立葦山高校  
写真報道探究部



# ただ最高のホテルとして 味と湯の宿 ニューとみよし

現在日本の産業にダメージを与える新型コロナ。このような状況の中、ホテル「ニューとみよし」は6月から12月のGOTOの期間にほぼ毎日全部屋満室という驚くべき結果を残した。ホテルとしてコロナ経営をどう受け止め、どう経営し、そして会社としてどうあるうとしたのか、代表取締役社長の富岡篤美さんに話を聞いた。

富岡さんの実家では父と兄が「富義丸」という船を操業しており、その漁船から名を取った「とみよし」という宿を網代で営んでいた。次男であった富岡さんは、分家し伊豆多賀の地で宿泊業を始め、生家の宿名に「ニューとみよし」が誕生した。宿のある伊豆多賀は、自然豊かな場所、熱海駅周辺の街並みとはまた

一味違う、ゆったりとした雰囲気味わえる。カッブルや家族連れなどの個人客が多いのが特徴で、少人数でゆったりと食事や温泉を味わえることを「ニューとみよし」の売りとしている。富岡さんはコロナ禍においてのこういった客層について「高齢の方や乳幼児等の利用は少なく、健康な若い人の利用が多い。私みたいに不健康な人の割合は少ない。(笑)」と語った。

## 多賀をより魅力的に

このように伊豆多賀の魅力と顧客のニーズを合わせてサービスを提供している「ニューとみよし」だが、地域社会とも強いつながりがあり、熱海高校と「ニューとみよし」のコラボ企画である高



楽しそうに語る 富岡篤美さん

校生ホテルだけではなく長浜海岸の清掃にも携わっていたり、管理や開発にも関わっている。富岡さんは地域との交流について「地域の支えが無ければ宿泊業は難しい。長浜海岸等の観光の拠点をきちんと整備し魅力ある街づくり地域と一緒にやって取り組まなければならない。」と語った。

## 経営者として

富岡さんは仕事で意識していることについて「従業員にも言っている自分も心掛けていことだが正直にやることを心掛けています。普通できないことをできないと言わないことは勇気がいる。お客さんにも始めにできることとできないことをはっきりと心掛けることを心掛けている。」と語った。最初に中途半端にできないことをできると言ってしまうと防げない、無理をしないということ宿の基本理念として置いている。また、富岡さんは営業の辛い時期をどう乗り越えてきたのかについて「逆になんか悪いときは悪いなりに、良いときは良いなりにやることがあるとよくわかった。」と語った。



露天風呂「海」景色は絶景である。

うやって超えてきたかについて「誰よりも早くから働き、誰よりも遅くまで働いた。」と語り、今年のコロナについて「ジェットコースターみたいだ。稼働率が100%に近い月、0%に近い月、自分も40年商売をやっているが初めて。逆になんか悪いときは悪いなりに、良いときは良いなりにやることがあるとよくわかった。」と語った。

# 伊豆新聞本社 新聞を作る企業として



インタビューに答える 佐藤裕一さん

伊豆地域を取材対象エリアとし、新聞を発行している伊豆新聞本社。今回我々はコロナが猛威を振るっているこの2020年に伊豆新聞がどのような取り組みをしているか知るために、本社に向き、記者の佐藤裕一さんと総務局長の小原央多さんの話を伺ってきた。

## 記者として

取材担当の佐藤さんは新聞記者として新聞を書く上で心掛けていることは「自分の思いを相手に伝えるのではなく、相手の思いを多くの人に伝える。相手が言いたいことや必要なことを客観的に受け止め間違えないよう記事にする。」と語り「新聞を作るうえで正しいことを正確に分かりやすく伝えなきゃいけない。だからちゃんと嘘じゃないのか確かめ、正しいことを伝えなきゃいけない。」

と話した。新聞社として新聞作成の基礎であり重要な部分を踏まえながら伊豆新聞本社では日々伊豆新聞が作成されている。また、誤報等のミスや失敗について「たまに新聞に小さく訂正記事がついていると思うが、こちらが正しいと思いが、実際は違い、チェックをすり抜けてしまうという事がある。それらはあつてはいけないことであり、恥ずかしいけれど次の日の新聞で訂正し、正しい情報を載せるよう努めている。」と語った。また、取材や写真について「基本一人でやる。自分でカ

メラ係とメモ係を全部一人でやる。」と話し「新聞の写真を撮る際はニュースの内容が伝わるようなものを撮るよう心がけている。」と語った。佐藤さんは一人の記者として今中心に取り組んでいることについて「それぞれ持ち場があるが、自分は福祉や観光を中心に取り組んでいる。」と語り、小原さんは会社全体として取り組んでいることについて「コロナ禍で町の元気がなくなっているのを、町を盛り上げるように頑張っているお店を軒一軒取り上げるなどして、元気がない街を新聞

## 地域と共に

佐藤さんは今後頑張りたいことについて「地元にある身近なお店を紹介するという読者から好評な企画があり、コロナ問題だけではなく切り口を変え、飲食店や地



伊豆新聞本社の編集部の様子

元の記事や団体など、より幅を広げ、読者や取材された方がより元気になるよう頑張りたい。」と語った。今後も伊豆新聞本社に注目していきたい。今回私たちは三島信用金庫さんの協力の下、「伊豆新聞本社」とホテル「ニューとみよし」の二社にインタビューを行いました。コロナ禍ということもあり、混乱した事もありましたが初めてこういった企業の取材に行った新入社員も多かったため、貴重な体験となりました。伊豆新聞本社の取材では新聞社としての垣根を超えた地元に対する強い愛を感じました。「ニューとみよし」の取材では、お客様へのサービスに対する情熱と従業員一人一人の事を重要視

## 編集後記

しているという一つの企業としての情熱を感じました。今回の記事で少しでも地元企業に対し興味をもって頂ければ幸いです。(熱海高校報道部)



## 今後について

「ニューとみよし」は来年から新館の建設を含む大きな増築工事が始まる。それに合わせて富岡さんは事業承継に取り組んでいる。富岡さんは事業承継について「次の立派な経営者を育てるのが一番の仕事だ。僕がもしちゃんと育成できればここをもっと立派な宿にしてくれるはず。人間何が大事かって次に自分の後をちゃんとバトンタッチをする人を育てるのが一番大事だと思う。」と語った。